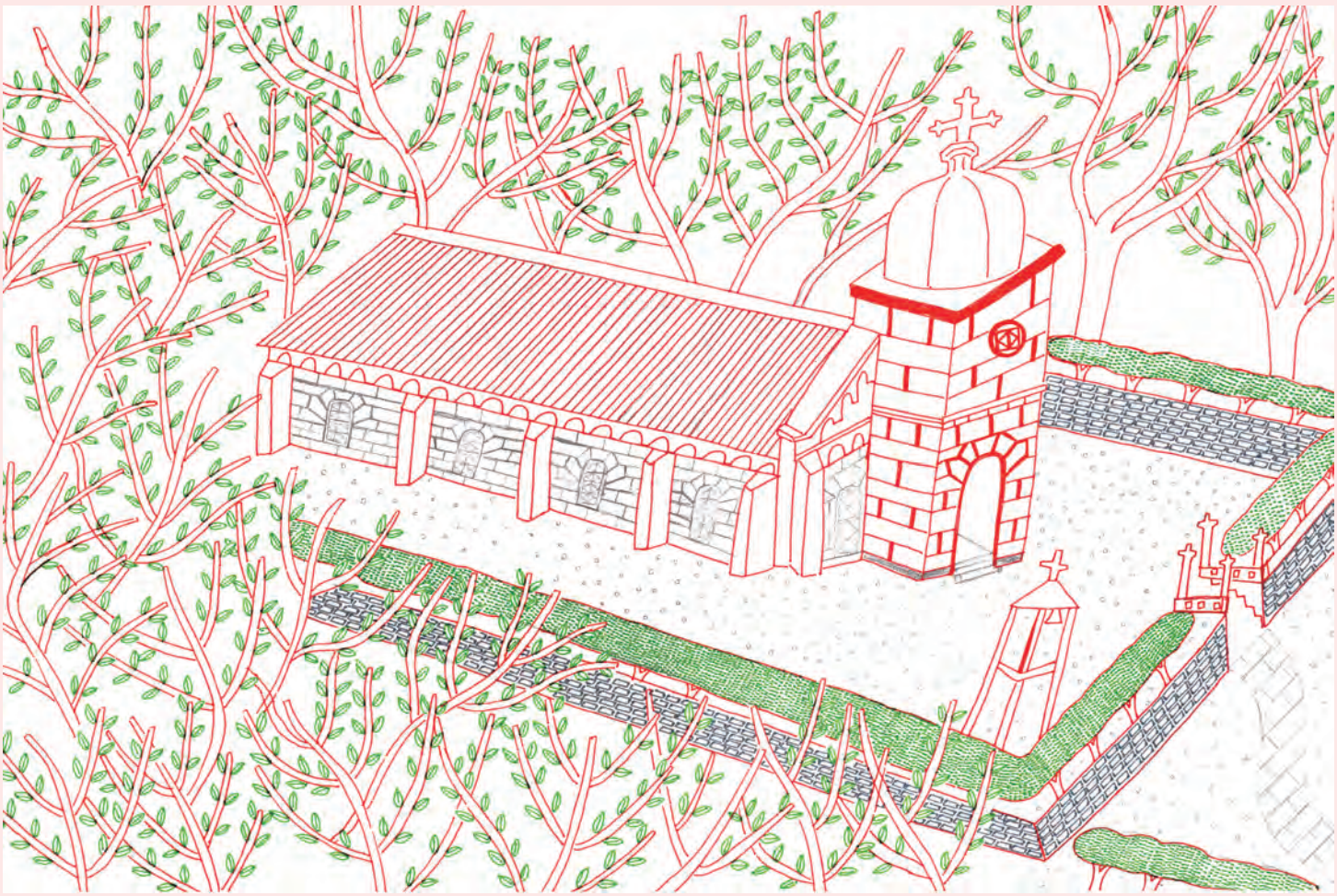
県立長崎図書館だより

いしだたみ

No.197
2025年3月



「頭ヶ島天主堂」（イラスト　山下アキ）

もくじ

◎特集：全国図書館大会長崎大会 …… P２
◎長崎ゆかりの文学／高塚かず子氏寄贈 …… P４
◎長崎の郷土新聞デジタル化 …… P５
◎おすすめの本「日本語と英語で読める本」
　ミライ on 図書館からのお願い …… P６

山下アキ 原画展 開催決定！

期間：４月２日（水）～６月８日（日）
場所：県立長崎図書館郷土資料センター
　　（長崎市立山１丁目１－５１）

「第110回全国図書館大会長崎大会」が開催されました！

2024年11月30日(土)～12月1日(日)に「第110回全国図書館大会長崎大会」が長崎県庁および長崎大学附属図書館で開催されました。
(オンライン形式の分科会については、2024年11月30日～2025年1月10日に配信)

長崎県教育委員会教育長 前川謙介氏の開会の言葉に始まった本大会は、「図書館がつなぐ人・まち・ミライ～21世紀の出島(長崎)から～」のテーマのもと、会場は約300人の参加者の熱気に満ち、盛会のうちに終えることができました。

開会式　教育長挨拶

「第40回日本図書館協会建築賞」表彰式

「第14期認定司書認定証」交付式

小説家　澤田瞳子氏の記念講演

1日目の全体会では、直木賞作家　澤田瞳子氏による記念講演が行われました。澤田先生には、「読書のもたらすもの」というテーマについてご講演いただき、ご自身の生い立ちも踏まえ、物語の大切さについて「源氏物語」など具体例を挙げながら熱心に語っていただきました。参加者はその一言一句に引き込まれていました。

記念講演を終えて

小説を書くとは農業をすることに似ている。田を耕し、種を撒き、いい作物を作って出荷する。その先、つまり市場で値を与えられ、商品として箱詰めされ――多くの人の手を経て、消費者に届くところは、小説家には見る機会があまりない。なぜならその頃には次の作品のために種を撒き、育ってきたものにせっせと向き合っている最中だからだ。そんな小説家にとって、図書館は書店とともに、読者と書籍を直接結ぶかけがえのない場だ。我々が目にすることのない読者さんの姿を、声を、いつも間近になさっている。今回、全国図書館大会の講演・シンポジウムに参加させていただいたことは、私にとってもとてもありがたく、同時にまたとない学びとなった。心より御礼を申し上げたい。

澤田　瞳子

対面形式による分科会（第１～3分科会）

大会1日目に第３分科会（学校図書館）のトークセッション、2日目に第１分科会（公共図書館）、第２分科会（大学・短大・高専図書館）が対面形式で行われました。

●第1分科会
石川県立図書館長 田村俊作氏の基調講演をはじめ、諫早市立図書館長 石山雅晴氏、五島市立図書館長 野口良美氏、筑後市立図書館長 一ノ瀬留美氏による事例報告、最後には参加者による情報交換会を行いました。

第１分科会　事例報告

●第2分科会
学生コンシェルジュや車いすの学生、大学図書館職員による事例報告を行い、後半はワークショップ形式でグループワークやディスカッションを行いました。

第２分科会　ワークショップ

分科会発表者にインタビュー！
【第2分科会　石原さん、宮嶋さん、一瀬さん】
デジタル化が進む中で、それらのことに時間を割くことが多くなってきている今、目の前の学生に対するサービスや支援が大事であるということを再認識できる良い機会となりました。

●第3分科会
前半は澤田瞳子氏や司書、現役の高校生らがそれぞれの立場から学校図書館の現状を報告し、後半はこれからの学校図書館のミライについて考え、来るべき未来の図書館像について「長崎モデル」というべき提言を行いました。

第３分科会　トークセッション

懇親交流会

全国の図書館関係者約１４０人が参加し、おいしい郷土料理と県産酒を前に情報交換に花が咲きました。
また中国の伝統芸能「変面ショー」で会場が盛り上がりました。

長崎県産酒

変面ショー

長崎ゆかりの文学
～県立長崎図書館に残る文学者の足跡～

第２回
さだまさしと長崎

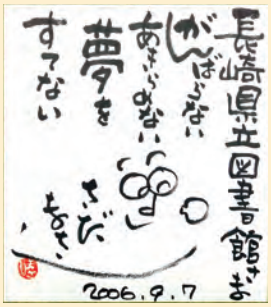
長崎外国語大学非常勤講師
（元県立長崎図書館指導主事）　中島　恵美子

長崎県で今年９月から11月まで開催される「ながさきピース文化祭 2025」のスペシャルアンバサダーは、長崎出身のシンガーソングライターで作家のさだまさしです。

さだまさし（本名・佐田雅志）は、昭和２７年、長崎市生まれ。バイオリン修行のため１３歳で単身上京。國學院大學へ進学後、身体を壊して帰郷しました。長崎で吉田正美とグレープを結成。「精霊流し」が大ヒットしました【写真１】。ソロとしても、「秋桜」「案山子」等のヒット曲を輩出し、「関白宣言」は日本レコード大賞金賞を受賞。ＮＨＫ「鶴瓶の家族に乾杯」のテーマ曲等もさだの作品です。

【写真１】精霊流し
（長崎県観光連盟提供）

作家としては、平成１３年に小説『精霊流し』を発表。ドラマ化、映画化されました。脚本は、諫早出身の脚本家・市川森一です。小説『解夏』『眉山』『風に立つライオン』なども映画化され、小説『かすていら 僕と親父の一番長い日』や『ちゃんぽん食べたかっ！』はドラマ化されました。エッセー集『いつも君の味方』『今夜も生でさだまさし』などもあります。県立長崎図書館には、さだの文学者としての足跡を残す直筆色紙が「長崎ゆかりの文学」貴重資料として所蔵されています【写真２】。



【写真２】
さだまさし直筆色紙

被爆地・長崎の出身であるさだは平和への思いが強く、昭和６２年から２０年間、毎年８月６日の広島原爆の日に、長崎で平和を祈るコンサート『夏・長崎から』を開催。長崎市のナガサキピースミュージアムは、さだの平和を希求する活動「ナガサキピーススフィア 貝の火運動」から生まれたものです。小説『風に立つライオン』は、長崎大学熱帯医学研究所の医師・柴田紘一郎がモデルです。一般財団法人「風に立つライオン基金」を設立し、国内外の僻地医療や大規模災害の復旧現場を物心両面から支援しています。

長崎県立長崎明誠高等学校や南島原市立有馬小学校の校歌は、さだの作詞作曲です。平成８年に長崎県民栄誉賞、平成１６年に長崎市栄誉市民の称号が授与されました。長崎市内の佐田家の墓地にはヒット曲「無縁坂」の歌碑があります【写真３】。

【写真３】「無縁坂」歌碑
（長崎文献社提供）

故郷・長崎をこよなく愛し多大な貢献をしてきたさだまさし。長崎の風土が育んださだまさしの作品は、長崎はもとより全国の人々に愛され続けています。

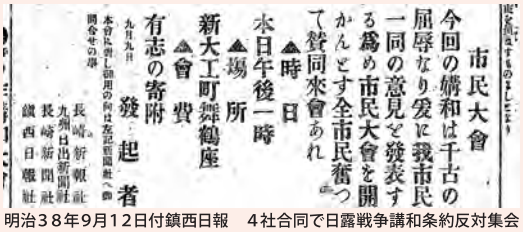
詩人の高塚かず子さんより版画を寄贈していただきました

昨年１２月、詩人で元長崎県教育委員長の御厨和子（高塚かず子）様から、詩画集「生きる水」の表紙に使われた銅版画「さかな（鳥海太郎作）」の寄贈がありました。「生きる水」は、自然の大きな流れといのちの営みを見つめ、第４４回Ｈ氏賞を受賞した詩集『生きる水』に、版画家・鳥海太郎によるのびやかで生命感あふれる版画作品を組み合わせた詩画集です。ぜひ図書館で手に取ってご覧ください。

長崎の郷土新聞デジタル化

日本で初めて発行された英字新聞は幕末の長崎で発行された「Nagasaki Shipping List and Advertiser」（1861年6月～10月）でした。その後、明治元年・2年の長崎で「Nagasaki Times」、「Nagasaki Shipping List」と創刊・廃刊を繰り返し、以降も「Nagasaki Express」、「Rising Sun and Nagasaki Express」など続きます。英字新聞の発行が続けられたことは、居留地があった近代長崎の歴史を物語ります。残された英字新聞の多くは、長崎歴史文化博物館に収蔵されていますが、2025年3月末からデジタル画像により当郷土資料センターでも閲覧できるようになります。

長崎発祥となる活字印刷技術の発展に伴い、日本語の新聞も発行されるようになりました。明治の一時期には、長崎市中で5つの新聞が鎬を削るという状況も生まれました。「鎮西日報」「長崎新報」「九州日之出新聞」「東洋日の出新聞」「長崎新聞」の5紙。その他にも、県内では佐世保新報・佐世保軍港新聞、島原毎日、諫早民友、五島新報、対馬新聞等々、まさに新聞の百花繚乱。しかし、その新聞のなかで創刊から廃刊まで、漏らさず今に伝わるものは、ほとんどありません。まったく現存しない新聞すらあります。明治10年代から30年代にかけての長崎を代表する新聞「鎮西日報」の原紙は、ほとんど長崎には残っておらず（複写版で閲覧可能）、現在の長崎新聞の系譜に連なる「長崎新報」（明治22年創刊）がまとまって残されているのは、創刊から18年も過ぎた明治40年からです。もともと新聞は読まれたら捨てられる運命のメディアでした。今でこそ、各新聞は発行と同時にデジタルデータとして保存していますが、かつては意識的に将来に向けて残したいと考える人がいないと残らなかったのです。


市民大會
今回の媾和は千古の
屈辱なり爰に我市民
一同の意見を發表す
る爲め市民大會を開
かんとす全市民奮つ
て賛同來會あれ
▲時日
本日午後一時
▲場所
新大工町舞鶴座
▲會費
有志の寄附
發起者
長崎新報社
九州日出新聞社
長崎新聞社
鎮西日報社

明治38年9月12日付鎮西日報　4社合同で日露戦争講和条約反対集会開催の広告。この時東洋日の出新聞のみが条約賛成の論戦を張った。

鈴木天眼というジャーナリスト兼政治家が長崎で創刊した「東洋日の出新聞」は、明治35年1月の創刊号から大正13年末まで、ほぼ22年間の原紙が残されています。その大半は、社主の鈴木天眼が亡くなった数日後、妻・タミから、県立長崎図書館に寄贈（大正15年12月10日付）されたものです。九州日之出新聞から別れて創刊された東洋日の出新聞ですが、社主の天眼はかつて天佑侠のメンバーとして朝鮮問題に関わり、孫文の支援者でもあった人物で、大陸情勢に詳しい新聞として読者を増やしていったようです。発行は天眼の死後も金子克己（佐世保出身）が引き継ぎ、昭和9年まで続きますが、昭和初期の「東洋日の出新聞」は現存しません。

明治三五年一月一日付け東洋日の出新聞「道の尾温泉広告」

これまでデジタル化されていなかった明治35年1月の創刊号から同年2月末までの「東洋日の出新聞」のデジタル化を新たに行い、英字新聞と同じく博物館と郷土資料センターで閲覧が可能になります。

政治経済のみならず、いわゆる三面記事や広告欄・演芸欄など、時代の映し鏡として新聞はおもしろい資料です。ぜひ来館してご覧ください。

明治35年6月29日付東洋日の出新聞４面「鈴木タミ寄贈」印

今号「いしだたみ」の表紙イラストを描いてくださった山下アキさんの原画展「山下アキが描く長崎」を郷土資料センターで４月２日（水曜日）より開催します。繊細な線で描かれた山下さんの作品を間近に見るチャンスです！詳しくは郷土資料センターのＨＰをご覧ください。

おすすめの本　日本語と英語で読める本

２０２０年４月より小学生の授業に英語が追加され、英語の必要性が益々上がってきています。そこで今回は、日本語と英語の２ヶ国語で書かれた本の一部をご紹介します。
また今回紹介する本以外にも、ミライｏｎ図書館ホームページの蔵書検索で「英文併記」と書名検索すると、日本語・英語両方で楽しめる本を探すことができますので、是非ご活用ください！

「HIRAGANA TIMES（ひらがなタイムズ）」（月刊雑誌／ひらがなタイムズ編集部）

主に日本文化を紹介し、すべての記事が日本語（ふりがなあり）と英語で書かれている雑誌。忍者・茶道・歌舞伎・桜・マンガ・アニメ等様々な日本文化の記事を２つの言語で見比べながら読むことができます。

「サッカーボール海を渡る」（2019 年 2 月刊、飼牛 万里／著、海鳥社）

災害の影響で海に流されていくサッカーボールの物語。前からは日本語、後ろからは英語で書かれており、ページ数も少なめなので気軽に読むことができます。

「どこへいくの？ともだちにあいに！」（2001 年 11 月刊、いわむらかずお／作・エリック・カール／作、童心社）

日本語・英語で書かれた絵本というだけではなく、前から読むと「14ひきシリーズ」の作者であるいわむらかずおさんの絵で描かれた絵本、後ろから読んだら「はらぺこあおむし」の作者であるエリック・カールさんの絵で描かれた絵本で、２つの絵柄が楽しめる絵本になっております。

「英語で読む外国人がほんとに知りたい日本の文化と歴史」（2019 年 8 月刊、ロックリー・トーマス／著、東京書籍）

イギリス出身の筆者が着物などの日本文化や京都などの観光地、海外に渡った偉人を日本語と英語で紹介しています。英語を学びながら違う視点から見た日本を知ることができるかも？

「A PILL BUG」（2022 年9月刊、アレン玉井光江／文・皆越ようせい／写真、東京書籍）

A PILL BUG（ダンゴムシ）の生態を学べる英語絵本。英語で書かれた本文と日本語の解説に分かれているので英語学習にも適しています。他にも小学生のための英語絵本シリーズとして「A FIELD TRIP（えんそく）」や「RAINBOWS（にじ）」等様々な本があります。是非読んでみてください。

こちらの２冊は、電子書籍でも読むことができます。下のＱＲコードから利用登録のうえ、お手持ちのスマートフォンやタブレットでぜひ電子書籍をご利用ください。

ミライｏｎ図書館からのお願い　卒業・入学・異動の季節です。

**借りたままになっている本はありませんか？図書館の本は県民共有の財産です。
万一返却されていない本がありましたら、ご返却をお願いします。**

※メインエントランス入口横の返却ポスト（24 時間対応）もご利用いただけます。
ただし、CD など破損の恐れのある資料についてはカウンターへ直接お返しください。
また、住所等に変更があった方は、ミライｏｎ図書館、県立長崎図書館郷土資料センターまでお知らせください。

※郷土資料センター、大村市内にある公民館図書室や住民センターに設置してあるポストへも返却ができます。（詳細はミライｏｎ図書館ホームページ・県立長崎図書館郷土資料センターホームページ内の利用案内にてご確認ください。）

編集・発行　長崎県立長崎図書館　長崎県大村市東本町４８１番地　ISSN 1344-5235
長崎県長崎市立山１丁目１番地５１号